
千夜一夜

佐月夏蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

千夜一夜

【Nコード】

N2810Y

【作者名】

佐月夏蓮

【あらすじ】

教会を兼ねた孤児院で育てられた青年アベルは、今日も貴族嫌いのシスター・エルのせいで仕事をひとつ潰されてしまう。

吟遊詩人をやって生計を成り立てている彼にとって、貴族も裕福な金持ちも大事なお得意様だ。

しかし貴族嫌いのシスターのせいで、彼はよく仕事を潰される。

運命の岐路を迎えたこの日もそうだった。

運命の運び手の少女と出逢ったときも、彼は仕事を潰され時間を
持て余していたのだ。

深い意味のないような、どこにでも転がっている出逢い。

それが自分の運命を根底から変えてしまうとも知らずに。

彼はひとつの出逢いを体験する。

その出逢いが次の出逢いを呼び、アベルの運命は急速に変わって
いくのだった。

この物語はブログ「蒼月華」で配信中の作品です。

序章（前書き）

新しい物語の始まりです。

本当はもうすこし様子を見るつもりでしたが、ブログの方で問題が発生したので、新連載に踏み切りました。

「失われた恋人」時に消えた伝説」共々よろしく願います。

序章

今日も穏やかに夕陽が沈んでいく。

何事もなく日は過ぎて人々が家路につく頃、青年はじつと中空を眺めていた。

今日は久しぶりの貴族の邸宅でのパーティーにお呼ばれていたのだ。

彼、アベルはそういう儲けられる機会は、なるべく逃さないようにしている。

ただでさえ裕福とは縁のない生活なのだ。

儲け時を誤ってはならない。

なのに。

口から深々とため息がもれる。

「エル姉に今日の仕事場が、貴族のパーティーだって知られたのが失敗だったな」

噴水の傍に腰かけたまま、だれにともなく愚痴る。

彼の姉代わりでもあるシスター・エルは大の貴族嫌いだ。

貴族と名のつくものなら、なんでもキライで、寄付金なども絶対に受け取らない。

相手が好意や善意で申し出ていても、だ。

おかげで生活はいつも火の車。

アベルが小さい頃に遊びで覚えた吟遊詩人の腕前がなかったら、果たして今頃生きていたかどうか怪しい。

とっても怪しい。

なにしろ教会は孤児院も兼ねているのに、エル姉は寄付金を受け取らないのだ。

貴族が名をあげるためとはいえ、善意を前面に申し出ていても。

そのためにアベルが小さい頃などは食べる物にも困る始末。

アベルが何気なく始めた吟遊詩人が大当たりしなかったら、きっと自分も子供たちも飢え死にしていた。

しかし吟遊詩人を名乗るからには、儲けるために貴族や裕福層は避けては通れない。

彼らこそ吟遊詩人に大金を投じてくれる相手だからだ。

選り好みしていたら、得られるお金も得られない。

しかしエル姉にはその論理も通じない。

とにかく「いやっ!!」の一点張りで通してしまうので、アベルはなるべく自分の仕事先は知られないようにしている。

普段からとても気をつけていたのだ。

なのに今日に限って知られてしまった。

「忌々しい」

呟いてポケットからカードを取り出す。

今日のパーティーの招待状だ。

これがないと入れないとかで、パーティーで演奏するだけのアベルにも送られてきた。

それですべてがバレてしまった。

エル姉は恐ろしい勢いで怒り狂い、アベルを部屋に閉じ込めた。

パーティーに出られない時間帯になるまで。

おかげで解放された今、こうしてすることもなく、夕陽を眺めている状態だ。

貴族はここ最近の怪盗騒ぎのせいで、開場時間を過ぎると、招待状を持っていても会場には入れてくれない。

その時間はとくに過ぎていて、つまり招待状があつて、パーティーには欠かせない吟遊詩人でも会場には入れないのだ。

「これでまたひとつ信頼を失ったなあ。もし悪い噂でも広がったら、俺、どうするんだ？」

さすがに心配だ。

今では孤児院を支えている生活費も教会の維持費も、捻り出しているのはアベルだというのに。

悪い噂が広がって仕事がなくなったら、とたんに生活は成り立たなくなってしまう。

「とりあえず……こんなところでブーツとしていてもしかたがないから帰るか。フィーリアも心配しているだろうし」

エル姉に閉じ込められた後で、さすがに怒って孤児院を飛び出してきたので、妹代わりのシスター見習いフィーリアが、とても心配そうに見送っていた。

それはわかっていたのだが、あのときはだれのせいで苦労していると思つていいのかと思うと、どうしても我慢できなかったのだ。

立ち上がったとき、だれかにドンツとぶつかられた。

完全に不意をつかれたので上体が揺れる。

「あっ」

高い声が悲鳴のような声を出すのを聞きながら、アベルの身体はそのまま噴水の中に落ちていった。

序章（後書き）

第1章は毎日更新します。

第2章は1日置きに第3章からは土曜日の配信になります。

第1章 教会と孤児院（1）

「踏んだり蹴ったりだ。ついてない」

連れに聞こえないようにアベルは愚痴る。

噴水に突き落とされた後、アベルは啞然として相手をみたが、相手はそれは可愛い女の子だった。

長い金髪を背中中でひとつに括っていて、可愛いエプロンドレス姿。

一見して良家のお嬢さんといった風情だった。

アベルにぶつかって噴水に突き落としてしまったことでオロオロしていた。

さすがに怒るに怒れず、アベルは気にしなくていいと笑ったのだが、どういうわけか相手の少女は気に病んで引かなかった。

いくら責任感が強い少女だったとしても、ちょっと異常なほどに。

それでそれとなく探りを入れると、どうも少女は行くアテがないらしかった。

ここで出逢ったのが救いとばかりに、アベルになついてきた次第である。

呆れて突き放そうかと思ったが、その事情を聞いた瞬間、少女のお腹がなった。

少女は赤くなってお腹を何度も叩いていたが、これには怒る気も失せてしまった。

それで結局、孤児院まで連れていくことになっている。

まあ元々が身寄りのない人々の集まりのようなところだ。

ひとりやふたり増えたところで困る人はだれもない。

しかし相手のことをなにも知らない状態で連れていくのも変だ。

さりげなく振り返る。

少女は後ろをつついて歩きながら、物珍しそうにキョロキョロしている。

その様子からみて、絶対に行くアテがないなんて嘘だろ、と、アベルは内心で突っ込む。

おそらく帰る家はあるのだ。

あるのに帰る気がない。

もしくは帰れない。

そんなところだろうか。

どこかの裕福な家のお嬢さんが、親とケンカして家出でもしてきた。

そんなところかなとアベルは考える。

「きみ……名前はなんていうの？」

「名前……ですか？」

突然話しかけられた少女は、幾分、身構えた様子をみせた。

「そう。名前。呼ぶ名前がないと不便だし。あ。俺はアベル。アベルっていうんだ」

「アベルさ……んですか。素敵な名前ですね」

微笑んでそう言うってから、少女はすこし間をあけた。

「わたしはレティといいます」

答えてきた少女にアベルは一瞬だけ視線を向けたが、なにも言わず「そう」と答えた。

本名じゃないかと読み取りながらも。

「これから俺が帰る家は孤児院だが、ちょっと騒がしいかもしれ
ないけど、あんまり気にしないで」

「孤児院？」

「身寄りのない者が集まって暮らしてるところだよ」

わからないかなと思って説明すると少女は赤くなる。

「そのくらいわかります。わたしにだって」

ブツブツと口の中で愚痴っている。

どうやら意味が通じたらしい。

「でも、それだとわたしが行ったら、ご迷惑ではないですか？」

「困ってる人を助けるのが教会の役目だから」

「教会？ さっきは孤児院って……」

「教会が孤児院を兼ねてるんだ。この辺だと珍しいらしいけど」

「たしかに珍しいですね。普通は孤児院と教会は別々だし」

そこまで言うてから、少女は首を傾げた。

「それだと生活はどうやって？ 教会への寄付金だけでは食べていけないのでは？」

「あー。うん。その辺は適当にね」

「適当……」

適当でなんとかなるのだろうか、少女の声に出ている。

しかしそこまでの内情を明かす必要性を感じなかったので、アベルはなにも説明しなかった。

「とりあえず怒られる覚悟だけはした方がいいな」

「どうしてですか？ あ。それはわたしが怒られるのはわかりますけどっ」

「いや。数少ない余所行きの服を汚したから、姉代わりのシスターに責められるんだよ」

ここまで言つてアベルは肩を竦めてみせる。

「この服を買うのに、どれだけのお金が必要だったと思ってるってね。それにこの服は普通に洗濯できないし」

カードが届く前に出掛ける準備を整えていたので、アベルはパーティー用の正装を着ていた。

アベルにしてみれば、かなり奮発して買った服だ。

それはエル姉も知っているので、この系統の服を汚すと、それはそれは責められる。

本当に普通に洗濯できないらしくて、使う洗剤やら洗い方やら、すべて特注になるらしい。

高価な服というのは扱いも特殊らしいのだ。

その辺はフィーリアに任せきりだから、アベルは詳しくは知らない。

だが、だからこそ、このことで責められると強く言えないのだ。

フィーリアに迷惑をかけたと責められると言いつ返しなないので。

しかしアベルが思索に耽っているあいだ、少女はふしぎそうに首を傾げていた。

「せんたく？」

意味を知らないと言いたげな声にアベルが振り返る。

少女はそれはふしぎそうな顔をしていた。

（もしかして？）

「洗濯……知らない？」

「あ。いえ。知っています」

「ふうん。知ってるんだ？」

白々と問えば少女は必死になって頷いた。

どうやらこれでごまかせると思っているらしい。

思っていた以上の箱入り娘だ。

これはそうそうに迎えがくるに違いない。

それまで丁重に相手をすればいいかと、アベルはさっそく覚悟を決めた。

こういうお嬢さんの道楽には、まともに相手をしないにかぎる。

でないとエル姉がキレるし。

第1章 教会と孤児院（2）

教会がみえてきて隣に建っている大きい古ぼけている建物の扉を開ける。

少女もおっかなびつくりついてくる。

「フィーリア。ただいまー」

声を投げるときも、どうしてか「エル姉、ただいま」とは言えなかった。

いつもなら「エル姉、フィーリア。ただいまー」なのだが、このときばかりはエル姉の名前は出せなかった。

「あつ。おかえりなさい、お兄ちゃんっ!!」

シスター姿のフィーリアが現れた。

金髪を肩で揃えていて瞳は紫。

傲慢の妹だ。

「ただいま、フィーリア」

頭を撫でるとフィーリアが幸せそうな顔になる。

まだ14歳。

それなのに家事をすべて任せて、おまけにシスター見習いとしての仕事もある。

苦勞させてるなとつくづく思う。

「お兄ちゃん、その人、だれ？」

「ああ、うん。レティっていうんだって。行くアテがないとかで、腹を空かせてたから連れてきたんだ。なんかある？」

「んー。お夕飯の残りなら。あ。お兄ちゃんの分もちゃんとあるよ？」

「わかってるよ。フィーリアが俺の分を食べるとは思ってないから」

「それからお姉ちゃんがお兄ちゃんに謝っていてほしいって」

「……」

「お姉ちゃん、とても後悔してたよ？ 自分の価値観を押しつけたって。全部お兄ちゃんのお世話になっっているくせにでしゃばりだったって。お兄ちゃんが出て行った後で泣きそうな顔してた」

「……そっか」

エル姉はたしかに貴族がきらいで、貴族絡みだと暴走してしまう。

だが、感情で動いても、こつやって反省することのできる女性だ。

だから、アベルは彼女をきらえないのだ。

どれほど苦勞させられていても。

今頃、教会の掃除でもして反省している頃だろう。

後で慰めておこつと心に決める。

そうして控えめに立っている少女の方を振り向いた。

「こつちにおいで。食べさせてあげるから」

「ごめんなさい。ご迷惑でしょう?」

レティがそう言えば、あからさまに怪訝な顔になって、フィーリアがアベルの耳許にささやいた。

「お兄ちゃん。このお姉ちゃん、帰る家がないなんて嘘でしょ? こんな上品な孤児みたことない」

「ああ。たぶん家出だと思う。まあ本人が家に帰れないって言うんだ。今は面倒をみておいて迎えがきたら、そのときに考えればいいだろう? 本人が帰りたいかどうかは別として」

「エルお姉ちゃん、怒るよ? もしこのお姉ちゃんが貴族だったらしたら」

「そうだったとしても、困ってることには違いない。エル姉がそこ

で追い出すのは、シスターとして失格だろ？　そこはフィーリアも説得しろよ。とにかく飯も食えないくらい困ってるのはたしかなんだからさ」

「食べられるだけのお金があって食べないのに困ってると言われても……」

「あいな、フィーリア。貴族って案外、金持っていないものなんだ」

「そうなの？」

きょとんとした顔になるフィーリアにアベルは重々しく頷いた。

「金持ち金持たずっていうのかな。貴族は出歩くときに金を持ち歩かない。つまり家出なんてしても、食べるお金は持っていないってことなんだ」

「それで家出してなんとかなるの？」

「普通なら悪い奴にさらわれて終わり、なんだろうけど、この娘の場合、俺と逢ってるからな。その分、運がよかったってことで」

「お兄ちゃんの貧乏クジを引く損な一面変わってないね」

呆れたように言われて、アベルは慌てて咳払いした。

「とにかくっ。飯だ、飯っ！！」

アベルは大股に歩いて行ってしまう。

フィーリアはクスクス笑って、呆気に取られているレティの方を振り向いた。

「お兄ちゃん、先に行っちゃったから追いかけよう?」

「あ。はいっ」

慌てて返事をするレティに世間知らずな一面が覗いて、フィーリアは改めて実感した。

レティの運のよさを。

アベル以外に拾われていたら、今頃どうなっていたか。

その辺をわかっていないらしいので、レティの運のよさも本物だと感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2810y/>

千夜一夜

2011年11月8日07時18分発行